様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月２８日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０６２２
研究課題名（和文）トランスナショナル・ヒストリーからみた移民政策の比較研究

研究課題名（英文）Comparative Studies on Immigration Policy from a Transnational Perspective

研究代表者
菅　美弥　（ SUGA MIYA ）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：50376844

研究成果の概要（和文）：本研究は、国家の枠組みを越えてクロスオーバーした移民政策の連動と相関性について新たな視点を提供し、第二次世界大戦後の、米・加・豪の移民政策変容の際のさまざまなトランスナショナルな連動・伝播の実態を明らかにするものである。主な研究成果の一端は、第二次世界大戦後の米国移民法から影響を受けた占領下の出入国管理政策の決定メカニズムを照射し、日米関係における棘ともいえる移民問題を通じて世論が「知米」と「嫌米」を揺れ動くという「歴史の教訓」が示された経緯を検証したこと、そして、この時期を、移民問題を通じたわが国と米国との関わりや、現代日本の人の移動や移民問題にまで関わってくるトランスナショナル・ヒストリーの一分岐点として浮かび上がらせたことである。

研究成果の概要（英文）：
This study sheds light on the revisions and transformation of immigration policies of the U.S., Canada, and Australia from a transnational perspective while taking the circulation of ideas, people and publications, and racial knowledge among these nations into account. It also analyzes the Japanese response to these revisions, especially the U.S. Immigration Act of 1952. It reveals that the experience of postwar Japan, presents a “lesson of history,” in which immigration issues, a longtime “thorn in the side of U.S.-Japan relations” once again became a weight in the pendulum of public opinion, which can easily swing between “pro-Americanism” and “anti-Americanism.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：トランスナショナル・ヒストリー、移民政策

１．研究開始当初の背景

1924 年米国移民法については、これまで同法が日米開戦の一要因となったとされることから、その成立過程や、戦前期の太平洋問題調査会（IPR）などを通じた移民問題への知識人の関わりについて多くの研究蓄積がある。しかし、1924 年米国移民法の差別措置が改正となった 1952 年米国移民法によるわが国への影響について照射する研究や、1952 年米国移民法と 1950 年代の加・豪の移民政策との連動についての研究は蓄積が少ない。1952 年米国移民法、1965 年米国移民法については、ふたつの転換点を結ぶ過渡期の改正運動を分析した研究として Mae M. Ngai, *Impossible Subjects: Illegal Aliens and the Making of Modern America* (2004)が挙げられるが、分析枠組みは米国政治史と社会史の交点に置かれている。

このように移民政策をめぐる歴史研究の実証研究レベルでは、依然として国境によって分断された記述が主流を占めており、トランスナショナル・ヒストリーの見地から検証した研究は国内外を問わず少ない。同時代に行われた米・加・豪の移民政策変遷における相互の影響をみる本研究では、そこに如何なる「移民国家」認識や歴史体験の共有がみられたのか、また、移民問題をめぐって如何なるトランスナショナルなネットワークが展開されたのか、一次史料から丹念に掘り起こすトランスナショナル・ヒストリーの検証作業が有効であるとの問題意識が本研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

本研究の主要な目的は、「移民国家」として知られる米・加・豪における移民政策の伝播についての検討と、加えて、「移民国家」として知られる米・加・豪だけではなく、移民問題を通じたわが国と米国との関わりや、米国移民法から影響を受けた占領下の出入国管理政策の決定メカニズムとその後の展開を照射することで、第二次世界大戦後の米国移民法を、わが国の現在の「人の移動」をめぐる政策に関わる、現代に生きる「我々の問題」として浮かびあがらせることである。具体的には、1：環太平洋「移民国家」の移民政策とわが国の出入国管理政策の決定メカニズムの解明、2：環太平洋「移民国家」の移民政策におけるトランスナショナル・ネットワークの解明を目的とした。

加えて、研究を進めるなかでこれまで知られていなかった移民政策の狭間を生きたトランス・マイグランツのライフ・ヒストリーを検証することも目的の一つとした。

３．研究の方法

研究方法としては、移民政策に関する基礎資料の収集及び目録作成を行った。

国内調査においては①日刊紙 *Nippon Times*（現在の *Japan Times*）等）、②一般誌（『改造』『世界』等）③研究誌の記事を収集し、わが国における移民問題関連記事・文献目録を作成した。また、米国から白豪主義下のオーストラリアへとトランスナショナルな移動を重ねた高須賀譲とその家族についての日本・オーストラリア双方の史料収集と末裔の方々へのインタビューを行った。

海外調査においては、米国連邦公文書館、議会図書館（ワシントン D.C.）、コロンビア大学オーラルヒストリー研究部門等において、移民政策決定プロセスにおける民間団体の果たした役割について資料収集・調査を行った。これら収集した史・資料については目録作成およびデータベース化作業を行った。

そのほか、オーストラリアの移民政策専門家を招いて公開の形で研究会、国際シンポジウムを主催したほか、カナダ、オタワ大学での国際シンポジウムにおいて招待講演を行い、各国の

第一線の移民・移民政策研究者との討議を深める機会を持ち、研究方法の確立と方向性の再考のために役立てた。

４．研究成果

本研究の理論的枠組みについては、日本移民学会第17回年次大会､第19回年次大会において、また日本アメリカ史学会学会誌への論文を通じて発表した。実証面の主な研究成果としては2008 年 10 月にカナダオタワ大学での国際シンポジウムで移民統計を使った黎明期の日系移民史像についての招待講演を行ったほか、論文を２本発表した。トランスナショナル・ヒストリーの断片を明らかにするべく史・資料収集とその課題についての検討を進めるなかで、1870 年、1880 年の米国人口センサスにおいて報告された初期日本人移民・移住者を事例として、主に米国のセンサス史・資料である人口センサス調査票原票と、移民局統計、出入国記録、乗船名簿などの従来からの移民史料を重層的に照合することによる、トランスナショナル・ヒストリーの可能性と課題について明らかにした。

国内調査に赴いた松山、神戸では、アメリカから白豪主義下のオーストラリアへとトランスナショナルな移動をした、高須賀譲についての調査を実施した。松山では、高須賀の屋敷跡等での現地調査のほか、図書館での資料収集や末裔の方へのインタビューを通じて、オーストラリア、日本双方の高須賀の末裔の方から貴重な資料を寄贈していただくこととなった。このようにトランスナショナル・ヒストリーの視座からの移民政策の検証に、移動する人々の具体的なありようを重ね合わせることで､より多面的、立体的な移民政策や移民・移住をめぐるトランスナショナルな歴史像に近づくことができた。

また、最終年度においては、第二次世界大戦後1952年に行われた米国移民・帰化法改正に対する、日本における様々なレベルの反応を検証し、日本の「移民問題」観、対米観についての論考を発表した。そこで明らかになったことは、移民法をめぐる「移民問題」とその余波によって、占領期から講和直後の「圧倒的な敗者」である日本人のうち「親米」が苦しみ、真の「知米」が生まれる機会の喪失に一部繋がったことである。移民問題への民間団体の関与とトランスナショナル・ネットワークの発展が「反米」「嫌米」の世論にかき消されたのである。また、新たな「移民問題」と戦前からの変わらぬ「移民国家」観が混在した1950年代が、日本の「移民政策」のあり方、すなわち、現代日本の「人の移動」や「移民国家」観にまで関わってくるトランスナショナル・ヒストリーの一分岐点としてたち現れてくることが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 菅(七戸)美弥、米国 1952 年移民・帰化法と日本における「移民問題」観の変容、東京学芸大学紀要　人文社会科学系 II、61 号、査読なし、2010、127-141

② Miya Shichinohe-Suga, Comments on: Dr. Tanaka Kei’s “Asian Populations and Pursuits of American Social Justice: Visualizing Japanese Immigrants,” *Nanzan Review of American Studies*, 31, 2009, 151-156

③ 菅(七戸)美弥、55 名の「ジャパニーズ」: 1870 年米国人口センサスの質問票（population schedule）への接近、東京学芸大学紀要　人文社会科学系 II、60 号、査読なし、2009、137-151

④ 菅(七戸)美弥、人の移動をめぐるトランスナショナル・ヒストリー（越境史）―日本における研究動向､アメリカ史研究､30､査読あり、日本アメリカ史学会、2007、35-47

⑤ 菅(七戸)美弥、「在米日本人」の諸相：米国センサス公開ミクロデータ(PUMS)を使用した分析､東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅱ､58 号､査読なし､2007､87-102

〔学会発表〕（計６件）

① Miya Shichinohe-Suga, Comments on: Dr.

Tanaka Kei's "Asian Populations and Pursuits of American Social Justice: Visualizing Japanese Immigrants," Nagoya American Studies Summer Seminars, 2009.7.26, Nanzan University, Nagoya

② 菅(七戸)美弥、米国センサス史料への接近:国立公文書館での収集を通じて、日本移民学会第 19 回年次大会、2009.7.4、同志社大学

③ Miya Shichinohe-Suga, The Transformation of U.S. Census Race Category and Japanese Migrants in the Late 19th Century, Nikkei in the Americas: Their Past and Present in Brazil, Canada, and the United States, 2008.10.17, University of Ottawa, Canada

④ 菅(七戸)美弥、19 世紀後半における「カラー」「人種」の境界の変遷と「ジャパニーズ」:米国人口センサス調査票から、移民研究会例会、2008.11.22、国際文化会館

⑤ 菅(七戸)美弥、「人種」と「祖先(エスニック・オリジン)」からみる「日系人/日本人」 "Japanese population in the U.S." : 2000 年センサスデータの分析、移民研究会例会、2007.2.23、国際文化会館

⑥ 菅(七戸)美弥、トランスナショナル・ヒストリーと「トランスナショナル」な移民研究の可能性、日本移民学会第17回年次大会、2007.6.23、大阪商業大学

〔図書〕(計 2 件)

① 菅(七戸)美弥、赤司英一郎、藤井健志ほか、白帝社、多言語・多文化社会へのまなざし―新しい共生への視点と教育―、2008、169～188

② 菅(七戸)美弥、飯野正子、島田法子ほか、明石書店、日本の移民研究　動向と文献目録 II、2007、27、36～38、152～154

６．研究組織

(1)研究代表者

菅　美弥　(SUGA　MIYA)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号:50376844

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号:

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号: